

日本河川・流域再生ネットワーク <http://www.a-rr.net/jp/>  <https://www.facebook.com/JapanRRN>

「日本河川・流域再生ネットワーク（JRRN）」は、河川再生について共に考え、次の行動へ後押しする未来志向の情報を交換・共有することを通じ、各地域に相応しい河川再生の技術や仕組みづくりの発展に寄与することを目的に活動する団体です。またアジア河川・流域再生ネットワーク(ARRN)の日本窓口として、日本の優れた知見をアジアに向け発信し、海外の素晴らしい取組みを国内に還元する役割を担います。(Since 2006)

目次	Pages
➤ JRRN 事務局からのお知らせ	1
➤ JRRN 会員寄稿記事	6
➤ 「多自然川づくりサポートセンター」からのお知らせ	12
➤ JRRN 会員募集中	13

JRRN 事務局からのお知らせ (1) JRRN Activity Report

「桜のある水辺風景 2019」へのご協力、誠にありがとうございました！

3 月から募集をおこなってきた「桜のある水辺風景 2019」も、5 月 31 日をもちまして写真募集期間を終了しました。

今年は、全部で 37 人の方から、62 点 72 枚、地域的には、北は宮城県から南は熊本県まで、全国 22 都府県の各地の桜と水辺の風景写真をご応募いただきました。

撮影箇所（都府県）一覧

東北地方	宮城県、福島県
関東地方	栃木県、群馬県、茨城県、埼玉県、東京都、神奈川県
北陸地方	富山県
中部地方	静岡県、長野県、愛知県、岐阜県
近畿地方	滋賀県、京都府、大阪府、兵庫県、奈良県
中国地方	岡山県、広島県
九州地方	福岡県、熊本県

ご応募いただいた方には改めてお礼申し上げます。また、ご応募には至らずとも作品を閲覧していただくなど日ごろから気に留めていただいた方にもお礼申し上げます。

募集期間は終了しましたが、ご応募いただいた作品については、Facebook ページと Twitter にて公開しておりますので、皆様、ぜひご覧ください。素晴らしい写真がたくさんありますし、コメントと併せてみるとさらに味わい深いものがあると思います。もし気に入っていただけたら、ついでに「いいね」や「フォロー」をしていただければ幸いです。

Facebook :

<https://www.facebook.com/sakuramizube/>

Twitter :

<https://twitter.com/sakuranomizube>



Twitter 画面

今後ですが、例年通り、写真集の作成に取り組んでいます。完成しましたら、随時、皆様にお知らせいたしますので、引き続き、よろしくお願いいたします。

桜のある水辺風景 2018 応募写真集



日本河川・流域再生ネットワーク

昨年（2018 年）の写真集

(JRRN 事務局・阿部充)

JRRN 事務局からのお知らせ (2) JRRN Activity Report

小さな自然再生普及プロジェクトー第1回北海道の応用生態工学 掲載論文の解説と展望 参加報告

2019年5月31日(金)、第1回北海道の応用生態工学～掲載論文の解説と展望～が「小さな自然再生」と「きつと役立つ省力化のモニタリング技術」をテーマに札幌で開催され、JRRN事務局も出席し、「小さな自然再生」に関する話題提供を行いましたので、以下に参加報告いたします。

第1回北海道の応用生態工学**掲載論文の解説と展望 その1**

【日時】 2019年5月31日(金) 13:30～17:00

【場所】 札幌エルプラザ2F 環境研修室

【主催／共催】応用生態工学会札幌／応用生態工学会会誌編集委員会

【プログラム】

テーマ1「小さな自然再生」

【論文の解説と展望】 「複数の手作り魚道はさけ科魚類の生息場所の回復に寄与したのか？」

町田 善康 (美幌町博物館 学芸員)

【関連講演】

-「小さな自然再生について」

後藤 勝洋 (日本河川・流域再生ネットワーク、(公財)リバーフロント研究所)

-「小さな自然再生の事例紹介」

有賀 望 (札幌豊平川さけ科学館、札幌ワイルドサーモンプロジェクト)

-「多自然川づくりと小さな自然再生」

岩瀬 晴夫 (小さな自然再生研究会(株)北海道技術コンサルタント)

テーマ2「きつと役立つ省力化のためのモニタリング技術」

【論文の解説と展望】 「全周魚眼スマートフォンカメラを用いた水生生物の遠隔モニタリング」ほか、遠隔カメラや画像処理を用いた水鳥やトンボ類、植生の監視事例について

山田 浩之 (北海道大学農学研究院基盤研究部門生物環境工学分野 講師)

【話題提供】

-「AIを活用したフィールドモニタリングシステム」

橋本 有悟 ((株)北海道技術コンサルタント)

テーマ1「小さな自然再生」では、今年1月の「小さな自然再生」サミットでご講演いただいた、美幌町博物館の町田さんから手作り魚道の論文解説をいただいた後、関連講演として、JRRN事務局から「小さな自然再生」の基本情報について紹介し、続いて「小さな自然再生」データベースにも掲載している札幌ワイルドサーモンプロジェクトの具体事例を有賀さん(札幌市豊平川さけ科学館)が発表され、「小さな自然再生」研究会メンバーである岩瀬さん(北海道技術コンサルタント)から「多自然川づくりと小さな自然再生」について現場での技術的な観点からまとめていただきました。意見交換では、どの現場でも共通の課題である、活動参加者の巻き込み方やモチベーションの維持、技術者(コンサルタント)としての役割などについて議論がなされました。JRRN事務局としても、専門性のない一般の方々でも川での活動に興味を持って、何かができることを認識してもらえるように、全国の事例データベースの拡充や相談窓口としての機能の必要性を強く感じたところです。



会場の様子

本企画は、応用生態工学会誌に掲載された論文から選ばれた研究・事例について、著者・連名者自身が論文の解説と展望について掘り下げて講演することで、応用生態工学への理解を深め、さらなる研究や現場への展開を図ることを目的とした、応用生態工学会では全国初の試みでした。

小さな自然再生を全国に普及すべく貴重な話題提供の場を企画、ご提供頂きました応用生態工学会札幌の皆様、どうもありがとうございました。

(JRRN事務局・後藤勝洋)

JRRN 事務局からのお知らせ (3) JRRN Activity Report

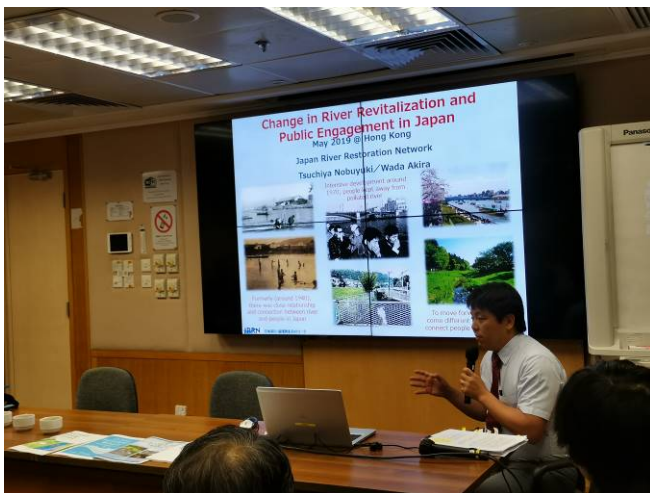
JRRN 国際活動 – 香港特別行政区政府渠務署(DSD)との河川再生に関わる技術交流報告

2019年5月27日(月)～31日(金)までの5日間、香港の河川及び下水道の管理全般を担う香港特別行政区政府渠務署(DSD: Drainage Services Department)を訪問し、河川行政に携わる DSD 職員及び香港内の都市河川再生プロジェクトを担うコンサルタントチームとの技術交流を行いました。本交流の概要を以下に紹介させていただきます。

【1】日本の都市河川再生の経験共有を目的とした講演会



JRRN 土屋代表理事による挨拶及び講演の様子



JRRN 事務局より日本の都市河川再生の歩みを紹介

技術交流のキックオフとして、約 50 名の DSD 職員を対象とした日本の都市河川再生の歩みや事例を共有する講演会が 5 月 28 日(火)に開催されました。

日本における都市河川再生に向けた取組みとして、1950 年代の水質改善や 1960 年代の河川空間利用に向けたルールの制定、1990 年代の多自然型川づくりや 2000 年代の自然再生、その後のかわまちづくりや河川空間オープン化などの変遷とともに、日本の川づくりにおける市民参加の歴史等について

も事例を含め紹介させていただきました。

また、香港での親水ニーズの高まりを踏まえ、日本で最初の親水河川である江戸川区の古川親水公園をはじめ、親水整備に関わる経験を共有させていただきました。

これまで香港では、河川を雨水排水路(Drainage)と位置づけ、洪水を海へと速やかに流下させる整備を行ってきましたが、この排水路を都市域における貴重な水と緑の河川空間へと再生していく事業に着手しております。日本が培ってきた都市河川再生に関わる様々な経験を活用頂くためには、日本の取組をレビューし伝えていく必要性を改めて感じることができました。



講演会終了後の記念撮影

【2】Yuen Long Town Nullah 再生事業の視察



5 月 29 日(水)は、洪水防御・水質改善・親水整備など複合的な河川整備を計画中の香港北西部を流れる Yuen Long Town Nullah を DSD 職員及びコンサルタントチームとともに視察しました。

本事業対象地域は海拔 5 メートル以下の低地に位置し、

IPCC 第 5 次評価報告書(AR5)による気候変動による 21 世紀後半の海面上昇は 0.26m~0.82m、さらに 50 年確率では最悪のシナリオで平均海面が 3.4m から 4.3m に上昇し、高潮災害のリスクが高まっています。そこで、この気候変動による影響を考慮した洪水防御計画が立案され、流末部での可動堰や排水機場の建設に合わせ、沿川から流入する汚水の分離対策、また現在はコンクリート三面張りとなっている河川の多自然化や親水整備を予定しています。



香港の河川は原則立ち入り禁止



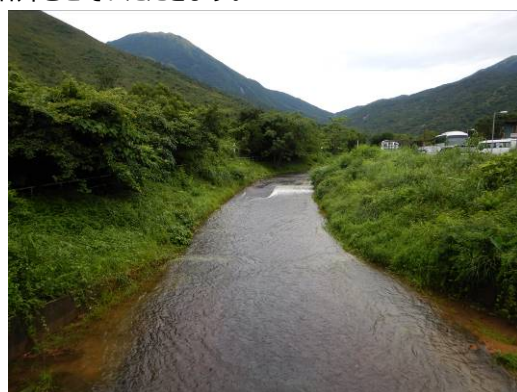
雨季と乾季の流量差が激しい香港の都市河川

なお、この Yuen Long Town Nullah 再生事業の概要は、JRRN ニュースレター vol.110(2016 年 8 月号)にて詳しく紹介しておりますので以下をご覧ください。

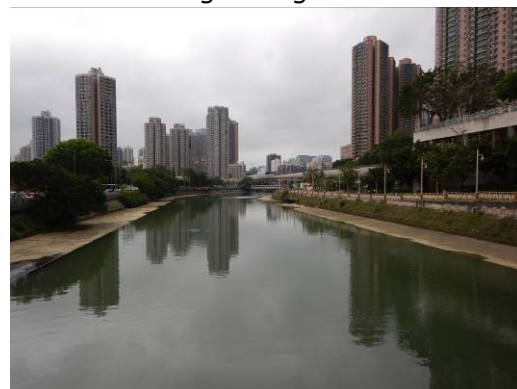
→<http://jp.a-rr.net/jp/activity/newsletter/398>

【3】その他河川の紹介

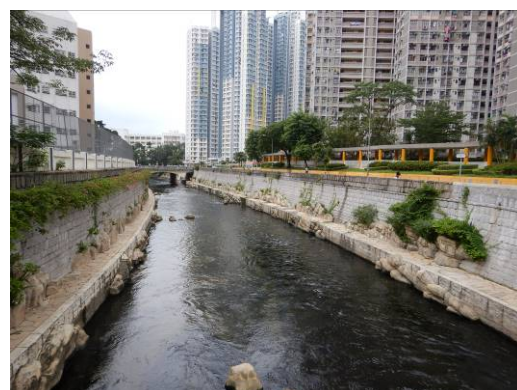
この度の訪問では、Yuen Long Town Nullah 以外にも複数の河川（排水路）を視察し、各河川を管理する DSD 職員やコンサルタントチームと河川再生に向けた技術交流を行いました。現在の香港の河川の様子を紹介することを目的に、いくつか紹介させていただきます。



Tung Chung River



Tuen Mun River



Kai Tak River

最後に、2009 年より始まった香港政府と JRRN との技術交流も 11 年目に突入しました。双方の経験や教訓の共有を通じ、香港及び日本における地域に親しまれる豊かな川づくりに引き続き貢献していきたいと思います。

(JRRN 事務局・和田彰)

JRRN 事務局からのお知らせ (4) JRRN Activity Report

JRRN 運営報告－「令和元年度 第 1 回 JRRN 理事会」開催報告

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN)の『令和元年度 第 1 回理事会』が下記の通り開催され、全議案が承認されました。

JRRN 設立から 13 年目となる本年の理事会では、これまでの国内外活動での経験を礎に日本及びアジアの豊かな河川環境の実現に益々貢献していくこと、持続的な活動の展開に向けて関係団体の連携や JRRN 運営体制を強化していくことなどについて審議しました。

1. 開催日時：令和元年 5 月 20 日（月）
16:00-17:30
2. 開催場所：（公財）リバーフロント研究所 会議室
3. 理事総数：4 名（内、1 名は JRRN 定款第 26 条に基づく書面表決）
4. 議案：
議案第 1 号 平成 30 年度 事業報告及び収支決算
議案第 2 号 令和元年度 事業計画及び収支予算
議案第 3 号 事務局の組織及び運営

事業報告、事業計画等の資料のダウンロードは下記 URL をご参照ください。

<http://jp.a-rr.net/jp/news/info/1071.html>



理事会の様子

(JRRN 事務局・阿部充)

JRRN 事務局からのお知らせ (5) JRRN Activity Report

JRRN 運営報告－「JRRN 事業報告 2018(JRRN Annual Report 2018)」発行

JRRN 理事会における平成 30 年度事業報告の承認を受け、JRRN の昨年度（2018 年 4 月～2019 年 3 月）の活動を取りまとめた「平成 30 年度事業報告書(JRRN Annual Report 2018)」が完成し公開致しました。（全 4 ページ）

平成 30 年度は、川づくりに関わる情報共有基盤の整備、川づくりの担い手の育成に向けた普及・啓発や協働・支援、国際的な技術交流に取り組みました。また、会員に関しては、団体会員は 1 増の 60 団体、個人会員は 23 増の 795 人となりました。

新たな元号を迎えた令和元年度も、川づくりの担い手に役立つ価値を生み出し普及して参りますので、引き続きご支援とご協力をよろしくお願いいたします。

※事業報告書（年次報告）のダウンロードはこちらから

<http://jp.a-rr.net/jp/activity/annual/71>



(JRRN 事務局・和田彰)



撮影：2018 年 8 月（群馬県 桐生市 桐生川）



あの日のあの川 リレー日記 ～第 44 話～



あの日のあの川
リレーDiary

みなさんはどの川でどんなことをした記憶がありますか？ 幼少期や青春時代に体験した川での記憶を日記として掘り起こして語るコーナーです。リレー形式で毎回次の人にバトンをつなぎます。

第 44 話主人公 近藤哲太

（筑波大学 社会国際学群 国際総合学類 白川（直）研究室『川と人』ゼミ）

（□川ガール・■川系男子）

（出身地を流れる川：群馬県桐生川）

「川とふれあう喜び」

いつのこと？： 小・中学校

どの川？： 桐生川

群馬県は三方を山々に囲われており中央に縦断するように利根川が流れ、関東平野へと注いでいます。私は群馬県の東端に位置する桐生市で生まれ育ち、渡良瀬川やその支流である桐生川と親しみながら生活していました。

中学校のころ、野球部に所属していた私は中学校沿いを流れる桐生川の歩道をランニングコースとして毎日利用していました。利用していた時間帯は登校前の午前 7 時ごろと部活動の午後 5 時ごろです。そうした時間帯には地域住民の方々を確認することができ、今思うと交流の場としての機能があると実感することができます。私自身、挨拶を交わす中でご近所の方に野菜を頂くことや、会話を通してかでのどのような人が周囲に住んでいるのか、ということを確認していました。河川沿いの景観や歩道としての機能は私が住む地域の生活において、お互いを認識しあう場所として身近な存在だったと感じます。

夏の思い出の中で印象に残っている場面があります。橋の上を通っていると下から呼び止められ、川をみると友人たちが泳いで遊んでいました。大きな岩によって流れが緩やかになり、水のたまった部分（深い）で夏になると泳いで遊ぶことができました。今思うと危険な一面もありますが、本当に楽しかったなあと時々思い出します。他にもザリガニやハヤを捕まえたり秘密基地を作ったりと、思っていたよりもたくさんの遊びをしていて、川は思い出の背景として今でも鮮明に残っています。



撮影：2018 年 8 月（群馬県 桐生市）

私は大学生となり、茨城県つくば市に住んで 4 年目となります。自分の生活圏内には地元にあったような川はなく、悲しいことに人工的・殺風景という印象が続いています。帰省し時間があるときは川沿いを歩いたり、ドライブしたりして、つくば市にない景色を楽しんでいます。上の写真は県道 66 号線を北上し、梅田湖・桐生川ダム周辺です。道から川辺に降りる階段を下り冷たい水に触れることができます。川が存在し、川に親しめる地域の幸せを感じています。

（次号は 8 月号にて中村さんにバトンを託します）

水辺からのメッセージ No.121

岡村幸二 (JRRN 会員)

水辺でかけっこ：
横浜郊外の緑につつまれて 人にやさしい川であそぶ



撮影：2019年5月（神奈川県横浜市泉区・和泉川）

◆親水河川の先駆けとなる

和泉川の草木橋から関島橋の区間は、もう 30 年以上前に川沿いに子どもたちも遊べる空間がつくられています。整備直後は樹木はもっと小さかったようですが、いまは“囲まれ感”が強い印象です。

◆都市と農村が混在する土地利用

和泉川は横浜市の南西部、まだ農地や樹林地が点々と残る都市郊外に流れています。スプロールのように市街がひろがって相鉄線や市営地下鉄の駅周辺に、川と森に囲まれたまちが形成されています。

■ 連載『水辺からのメッセージ』のバックナンバーは JRRN ホームページ内の以下のページよりご覧いただけます！
<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/mizube>

河川書の探求(14)

マンボ=カナートの憧憬

古賀邦雄・古賀河川図書館（JRRN 会員）

1. 三重用水事業とは

三重県北勢地方の鈴鹿山麓から伊勢湾にいたる広大な農業地帯は、地区内の中小河川、溜池、マンボなどを水源としていたが、いずれも水量が乏しく、安定して取水できる水源の確保に迫られていた。一方、この地方の産業の発展に伴い、四日市、鈴鹿市を中心とする都市用水の需要が増大し、その充足も緊急の課題であった。



(位置図出典:「三重用水事業パンフレット」より)

水資源開発公団(現・水資源機構)施行の三重用水事業は、これらの要請に対処するために、岐阜県側の木曽川水系揖斐川支川牧田川から取水し、貯留する打上調整池を造り、さらに主水源とする中里ダムを造り、中里ダムに打上調整池から導水して、加えて、員弁川、河内谷川、冷川による溪流取水して貯留する。

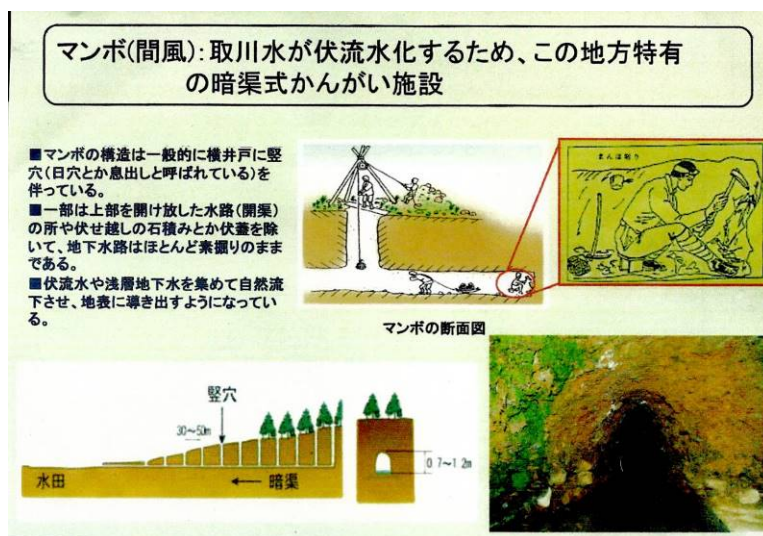
さらには宮川調整池、菰野調整池、加佐登調整池及び幹線水路の建設により、同様に溪流取水による田光川などの河川から取水し、貯留することで、これらの打上調整池、中里ダム、宮川調整池、菰野調整池、加佐登調整池はそれぞれ水

路で結び導水するプロジェクトである。この三重用水事業は、昭和39年度に着工し、平成4年に竣工し、今では三重県北勢地方へ農業用水、都市用水として導水され、地域の発展に大いに貢献している。

水の乏しい地域に溪流取水で調整池と繋ぎ、一滴の水を無駄なく利活用する技術に、先人の達の水を求める心と力に頭が下がる。

2. 北勢地方のマンボ灌漑

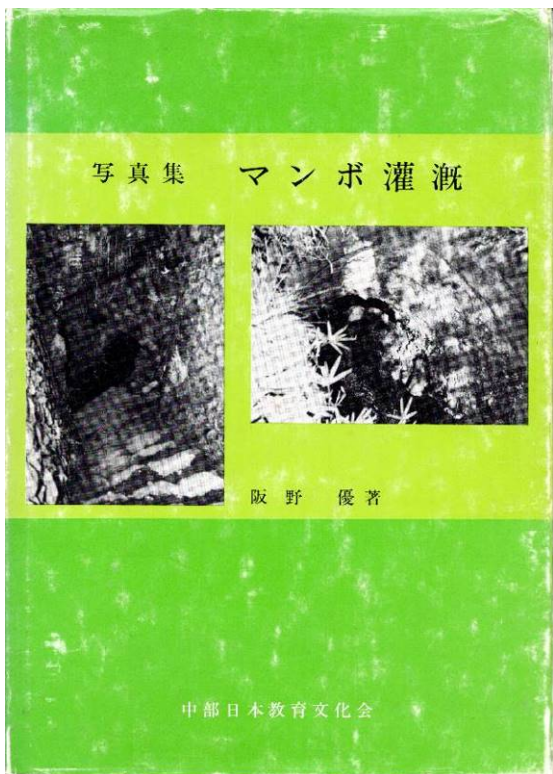
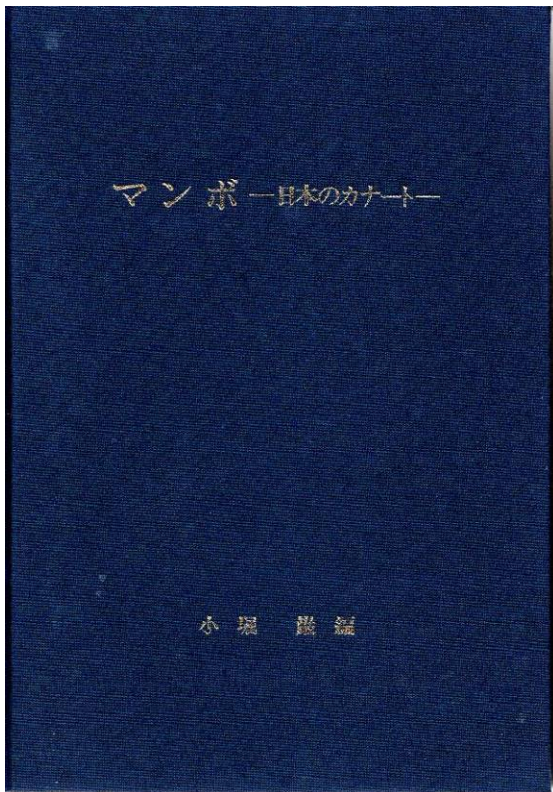
前述のように、鈴鹿山麓から伊勢湾に至る北勢地方の広大な平野は、水に恵まれず、中小河川から引水、天水、マンボ(横井戸)にたよる土地柄であった。江戸期に掘削されたマンボは、北勢町と大安町に集中している。マンボは、とり入れる河川が伏流水化しているために、竪穴と横井戸を掘り、暗渠化式をもって灌漑用水を水田に導水するのである。



(出典:「三重用水管理所資料」より)

「マンボ(間風):取川水が伏流水化するため、この地方特有の暗渠式灌漑施設」の図によれば、次のようになっている。

- ①マンボの構造は一般的に横井戸に竪穴(日穴とか息出しと呼ばれている)をともなっている)
- ②一部は上部を開け放した水路(開渠)の所や伏せ越しの石積みとか伏蓋を除いて、地下水路はほとんど素掘りのままである。
- ③伏流水や浅層地下水を集めて自然流下させ、地表に導きだすようになっている。



このマンボに関する書として、小堀 巖編『マンボ—日本のカナート』(三重県郷土資料刊行会・昭和 63 年)はサハラ砂漠の地下水道、三重県の鈴鹿郡下のマンボ灌漑、マンボと地域農業、マンボとマンボ祭りなどについて考察する。

坂野 優著『写真集 マンボ灌漑』(中部日本教育文化会・昭和 58 年)は、鈴鹿山脈の東麓の地形を捉え、続いて藤原町・北勢町・大安町・菰野町・四日市・鈴鹿市のマンボについて、写真で写しだす。

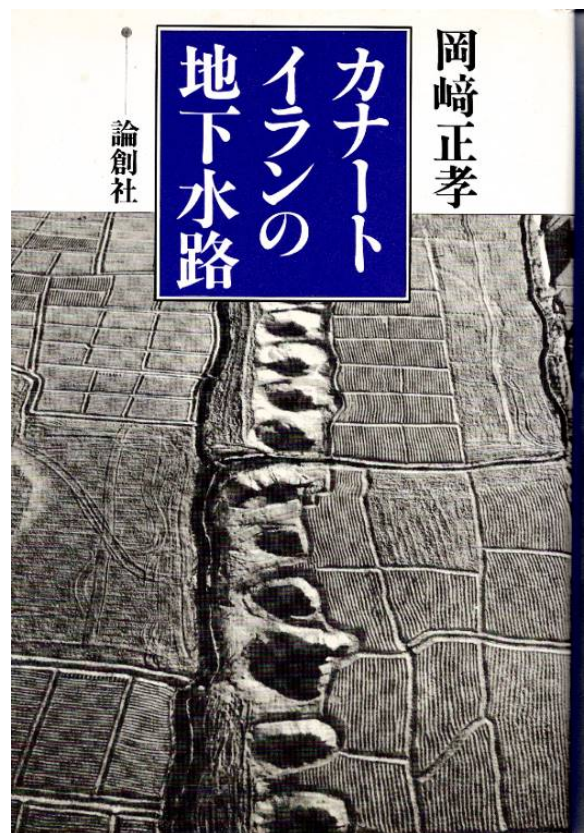
3. カナートイランの地下水路

イラン高原には、豎坑の深さ数十メートル、横坑の長さ 5～10 メートルで、人が屈んで歩けるくらいの地下水を導く暗渠、カナートが掘削されており、その数は 3 万本とも 5 万本といわれている。中には深さ 300 メートル、長さ 70 キロメートルにも及ぶ長大なものもある。岡崎正孝著『カナートイランの地下水路』(論創社・1988 年)は、イランの水の文化を造りだしたカナートを論ずる。

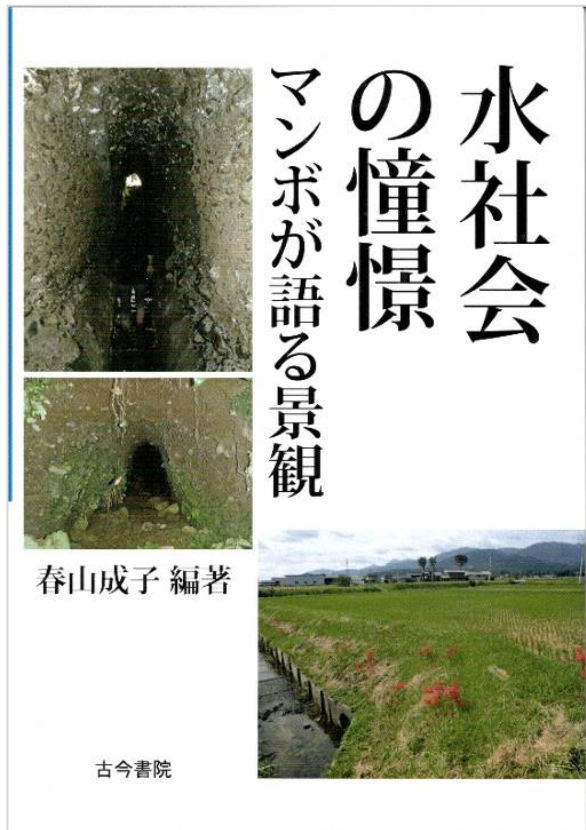
イランには水にまつわる風習がある。カナートの結婚の慣行は、カナートに妻がいないとカナートの水は涸れるとの言い伝えがあり、未亡人が選ばれ、カナートと結婚式をあげ、彼女は、夏と冬に月に 1 回は裸になって、カナートの水の中に身を横たえる。そうすればカナートの水は常時流れる。そうしないと、水が涸れてしまふと言う。

イランを発祥の地と言われるカナートは、人類に大きな貢献をなした。イランのみならず、多くの国々でカナートは用水供給を安定させ、人々を飢えから救い、生活圏を拡大させた。

沙漠の国イランが大国となりえたのは、まさに砂漠に豊かなオアシス集落や都市を造りだしたイラン人の自然に対する闘いの結果に他ならないと、著者は主張する。



4. マンボが語る景観



春山成子編著『水社会の憧憬 マンボが語る景観』(古今書院・2014年)には、マンボを湧水の一つと捉えて、北勢地域のマンボ水文化と三島市湧水環境と比較しながら論ずる。

即ち、劣化していくマンボの水文化とマンボの水利施設の将来展望を考え、なおかつ、三島市の湧水環境改善に向けた住民の結束力がマンボ水文化の復活を支えていけると、指摘する。

その内容は、①世界の地下水路とマンボ(モンスーンアジアのマンボなど)②水資源の利用を考える③マンボがとりまく自然環境(員弁川の流域・片樋・阿下喜のマンボ)④マンボの文化景観(片樋地区の水利用の歴史・用水と水田など)⑤現代社会のマンボ⑥マンボ景観カタログ⑦湧水環境改善するために、となっている。

北勢地方の片樋マンボでは、大安町文化遺産に指定されており、積極的な保全活動がなされている。マンボの出口には洗い場整備され、地域の人々が時折農具などを洗いにおとずれる。また、毎年大寒の日曜日には受益水田の耕作者らによる「マンボ浚い」作業、マンボに感謝するマンボ祭りも継続的に行われている。

富士山の伏流水による三島市の湧水地帯は、源兵衛川などの環境保全活動・水環境美化活動・観光振興系活動が継続的に行われており、地域住民の意識は高いと言える。

5. 三重用水とマンボ

三重用水は、鈴鹿山地に繋がる水の乏しい北勢地方の中小河川の渓流水を引水し、利用し、現代の技術を駆使して、地域に貢献している。

一方、北勢地方のマンボについては、江戸期から岩盤を掘削して、血の滲むような尽力で今日まで、有効に水の利活用を図ってきた。マンボの水文化を培ってきた。イランのカナートの同じような原理で、今でも利活用されているのには、驚嘆する。

三重用水、北勢地方のマンボは、ともに、水を求める先人たちの悠久な憧憬を覚えてならない。

■ 連載『河川書の探求』のバックナンバーは JRRN ホームページ内の以下のページよりご覧いただけます！

<http://jp.a-rr.net/jp/news/member/category/library>

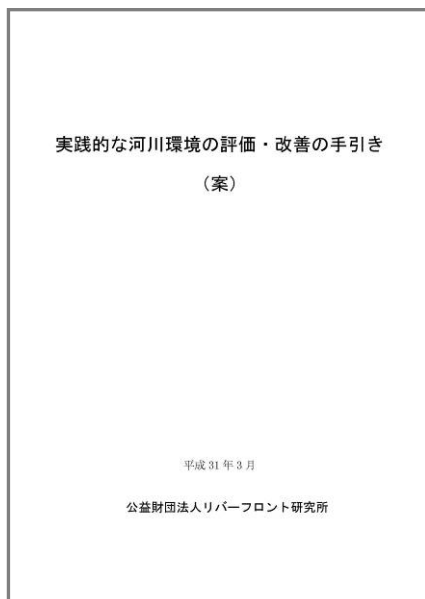
「多自然川づくりサポートセンター」からのお知らせ *Nature-oriented River Management Support Center*

※『多自然川づくりサポートセンター』は、多自然川づくりについての技術的な支援、市民との連携の強化、気軽な相談窓口、情報の共有等を担い、（公財）リバーフロント研究所が事務局を務めています。2019 年度より、JRRN は多自然川づくりサポートセンターと連携して川づくりの推進に取り組んでまいります。

河川法改正 20 年 多自然川づくり推進委員会 提言『持続性ある実践的多自然川づくりに向けて』（2017 年 6 月）に基づく新たな手引き&解説書が公開されました！

多自然川づくりサポートセンター事務局

■ 実践的な河川環境の評価・改善の手引き（案）



本手引きは、河川環境を定量的に評価する手法を具体化するために作成した手引きで、「実践的な河川環境の評価と改善の考え方に関する検討会」のご指導をいただきながらとりまとめたものです。

＜手引きの構成＞

はじめに：手引きのねらいと経緯を概説

1. 実践的な河川環境の評価と改善の考え方

実践的な河川環境の評価と良好な場を参考にした改善の考え方を説明。

2. 実践的な河川環境の評価方法と良好な場の設定方法

河川全体の俯瞰的な把握、及び、河川環境の定量的な評価を解説。

3. 河川環境改善の具体化の考え方

良好な場を参考とした環境改善の具体化を紹介。

4. 継続的な取り組みに向けて

実践的な河川環境の評価と改善の取り組みを継続・拡大するための支援を紹介。

※本手引きのダウンロードはこちらから：

<http://jp.a-rr.net/jp/resources/guideline/272.html>

■ 大河川における多自然川づくり－Q&A 形式で理解を深める



2017 年 6 月に示された提言「持続性ある実践的多自然川づくり」を受けて設置された「多自然川づくり技術検討会（大河川ワーキンググループ）」による検討成果として、大河川における多自然川づくりの解説書「大河川における多自然川づくり－Q&A 形式で理解を深める」が 2019 年 3 月に公開されました。

本書では、大河川における多自然川づくりを実践するため、現場で直面する課題を Question とし、これに Answer とし、答える形式で、これまで日本が蓄積してきた知見が分かり易く紹介されています。

＜構成＞

● 基本編

● 実践編

- 現況評価と目標設定
- 多自然川づくりの計画・設計
- 生態系ネットワーク
- 維持管理とモニタリング

※本 Q&A のダウンロードはこちらから：

<http://jp.a-rr.net/jp/resources/guideline/276.html>

JRRN 会員募集中 JRRN membership

■ JRRN の登録資格（団体・個人）

JRRN への登録は、団体・個人を問わず**無料**です。市民団体、行政機関、民間企業、研究者、個人等、所属団体や機関を問わず、河川再生に携わる皆様のご参加を歓迎いたします。

■ 会員の特典

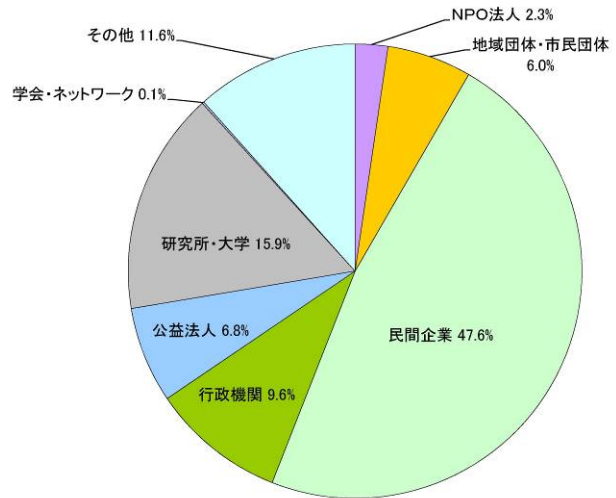
会員登録をされた方々へ様々な「会員特典」をご用意しています。

- (1) 国内外の河川再生に関するニュースを集約した「JRRN ニュースメール」が週 1 回メール配信されます。
- (2) 国内外のセミナー、ワークショップ等の開催情報が入手できます。また JRRN 主催行事に優先的に参加することが出来ます。
- (3) 必要に応じた国内外の河川再生事例等の情報収集の支援を受けられます。
- (4) JRRN を通じて、河川再生に関する技術情報やイベント開催案内等を国内外に発信できます。
- (5) 韓国、中国をはじめとする、ARRN 加盟国内の河川再生関連ネットワークと人的交流の橋渡しの支援を受けられます。

■ 会員登録方法

詳細はホームページをご覧ください。

<http://www.a-rr.net/jp/member/registration.html>



2019 年 5 月 31 日時点の個人会員の所属構成
 (個人会員数：797 名、団体会員数：60 団体)
 ※5 月の新規入会数：個人会員 3、団体会員 0

JRRN 会員特典一覧表（団体会員・個人会員）

提供サービス	JRRN 個人会員	JRRN 団体会員	非会員 (一般)
1 ホームページへのアクセス及び記事へのコメント入力 ※1	◎	◎	◎
2 ホームページ「イベント情報」欄でのイベント掲載 ※2	◎	◎	◎
3 ニュースメール(週1回)の配信 ※3	◎	◎	×
4 Newsletter(毎月)及び年次報告書(年1回)等の発刊案内メールの配信 ※3	◎	◎	×
5 JRRN/ARRN主催行事の優先案内・優先参加 ※4	◎	◎	×
6 国内外の河川再生関連情報・技術収集や専門家・組織紹介の支援 ※5	◎	◎	×
7 ホームページ「会員からのお知らせ」内及びニュースメール「会員からのご案内」欄で団体が関わる行事・出版物・製品等の案内の掲載 ※6	△※7	◎	×
8 ホームページ「会員登録状況」「国内団体」内及び年次報告書内で団体名の掲載	×	◎	×
9 ARRN活動に関連する英語ニュース(ARRN Newsletter等)の不定期配信 ※8	×	◎	×
10 JRRN及びARRNが保有する国内外専門家・団体等との連携等の支援 ※9	×	◎	×

会員特典詳細はウェブサイト参照：<http://www.a-rr.net/jp/member/benefit.html>

【お気軽にお問い合わせください】

日本河川・流域再生ネットワーク(JRRN) 事務局



〒104-0033 東京都中央区新川 1 丁目 17 番 24 号 NMF 茅場町ビル 7 階 (公財) リバーフロント研究所 内
 Tel:03-6228-3865 Fax:03-3523-0640 E-mail: info@a-rr.net
 URL: <http://www.a-rr.net/jp/> Facebook: <https://www.facebook.com/JapanRRN>